

小式部内侍から二話 宇治拾遺物語¹

小式部内侍は和泉式部の娘。教科書では「大江山いくの道の」の機転で有名。母に劣らずモテモテだったようだ。これらは、相手の男三人をめぐる話。

1 傍線は読解に役立つ重要語だから辞書で調べる。数字は単なる注釈ではなく読解で意識するポイント。駒沢大テキスト利用

三五 小式部内侍定頼卿の経にめでたる事「宇治拾遺物語卷三・三」

今は昔、小式部内侍に貞頼中納言物いひわたりけり。それに又時の關白かよひ給けり。局に入て臥給たりけるを、知らざりけるにや、中納言よりきてたたきけるを、局の人「かく」とやいひたりけん、沓をはきて行けるが、少しあゆみのきて、経を、はたと。二声ばかりまでは、小式部内侍、きと耳をたつるやうにしければ、この入りて臥し給へる人、あやしとおぼしけるほどに、すかし声遠うなるやうにて、四声五声ばかりゆきもやらでよみたりけると、^A「う」といひて、うしろぎまにこそ、ふしかへりたれ。この入り臥し給へる人の、^B「さばかりたへがたう、はづかしかりし事こそなかりしか」と、のちにのたまひけるとかや。

2 ものいふ情をかわす。貞頼中納言がつきあっていた。
3 それにまた、とは後から関白が通った。ということは貞頼と三角関係だな
4 直接訪問ということとは、和歌贈答は既に経て関係ができていくようだという平安常識。二人が鉢合わせしてしまうか、修羅場となるか。スリルだ

八一 大二条殿に小式部内侍歌読みかけ奉る事「同卷五・十二」

これも今は昔、大二条殿、小式部内侍おぼしけるが、絶え間がちになりけるころ、例ならぬことおはしまして、久しうなりて、よろしくなり給ひて、上東門院へ参らせ給ひたるに、小式部、台盤所にあたりけるに、¹⁰出でさせ給ふとて、「死なんとせしは、など問はざりしぞ」と仰せられて過ぎ給ひける。御直衣の裾を引きとどめつつ、申しけり。¹³
^C死ぬばかり嘆きにこそは嘆きしか生きて問ふべき身にあらねば¹⁴
堪へずおぼしけるにや、かき抱きて局へおはしまして、寝させ給ひにけり。¹⁵

5 「かく」の内容がはっきり分らないが、多分、男が来るとは言わない。
6 お経を読んだ。坊主に偽装したかな。
7 お経が、小式部内侍に通っている男のだとわかっていったんだろうな

8 おぼす＝尊敬語、大二条殿が小式部内侍をお思ひになっていた。＝情を交わっていた。

9 絶え間がちになったということは、付き合っていたのです。夜の訪問が絶え間がちになった。
10 例ならぬ事のと何が良くなったのかというところ、続きから病気だったとわかる。

11 小式部内侍には敬語が使われてない。

12 絶え間がちなのに強気に出たな、しかも重病だと大げさにいったような

13 おお、出た。例の機転ですね。

14 嘆いていたんだよ。けなげさマックス

15 歌からセックス

問1 敬語の使われ方から主語を想定し、A、「う」と言って後ろ向きに臥し返った理由と、B、堪え難いと思つた理由をそれぞれ説明せよ。

問2 C、歌を訳せ。下の句の下に何を補うと良いか。